

## 1. 鳥取大学附属中学校・小学校校庭

生徒数は、小中併せて（480×2）人。（前）校長が芝刈り役を買って出て、体育顧問の先生も遣る。最初は鳥取大学の中野先生が実験的に200㎡をパーミューダで刺し植え（田植えのように土にシバの苗を差し込んでいく工法）試験施工し、現在は増やしてライグラスをオーバーシディングしている。今は、4,000㎡。



★補足：パーミューダグラスとは、コウライシバやノシバと同じく、暖地型芝草の一種。コウライシバと同じように見えるが、匍匐茎（横へ伸びる茎）が空中を這う距離が、コウライシバより長く、しかも、高温期の成長がコウライシバよりも早い。一般的には擦り切れに強いとされ、スポーツターフに向いている。しかし、パーミューダグラスは、富山で言う梅雨後くらいの中間的な暑さでの成長が、かえってコウライシバより遅いため、コウライシバより優れているとは言いがたい。

日本芝草学会校庭芝生部会では、校庭の芝生化事業が成功するボーダーラインを20㎡/人としている。つまり、生徒数700人の学校では、擦り切れや劣化等で裸地部分を出現させるような不適正な管理状態を引き起こさない線としては、14,000㎡以上の芝生面積が必要という見解で進められている。しかし、この20㎡/人は容易な数値ではなく、鳥取大学附属中学校・小学校の場合は、 $480 \times 2 \times 20 = 19,200$ ㎡と計算され、4000㎡は、十分な量とは言えない。しかし、富山と違って鳥取は、土壌が砂質なせいか（分析したのではなく、なんとなくイメージとして）、シバの生育には適しているのだと思う。富山では、なかなか、このパーミューダの刺し植え＋OS（オーバーシディング）が（簡単に）成功するとは言いがたい。



## 2. NPO グリーンスポーツ鳥取芝生広場 <http://www.greensportstottori.org/>

- 湖山池の沿岸の20,000㎡
- パーミューダグラス＋ペレニアルライグラスのOS
- NPOのクラブハウスがある。
- 利用は自由で、ボールゲームの試合制限（常願寺川公園では50試合/年）などは設けていない
- 年間芝刈り60回以上。年間管理費100円/㎡（信じられない低額）

30年前に日本に来て、6年前から鳥取市に移り住んだニュージーランド人、ニール・スミス氏は、ラグビー・サッカーの愛好者、自治会長や市議員、鳥取大学農学部の協力を得て、鳥取県から20,000㎡の空地进行を6年間無償で借り受け、このグリーンスポーツ芝生広場を造成して管理している。

これに向け、県は条例を変更した（民間人に県有地を無償貸与できるようにしたとのこと）。氏はグリーンスポーツ鳥取というNPOを立ち上げた。県との契約はこのNPO名義で交わされている。その後、氏が集めた住民や賛同者が100人単位で集まって石拾いを行い、追って、2003年5月24日、バーミューダグラスの刺し植えを行った。以降は、年間60回のペースで芝刈りしている。その年の9月23日にライグラスを播種した。

「暗渠排水なし、土壌改良なし、利用制限なし」

刺し植えしてから、あるいはOS後も、一切の利用制限を行っていない。ペレニアルライグラスの播種日にもラグビー練習があった。たいていは播種後は発芽率の低下を理由に2週間程度の利用制限期間を設けるのが普通だが、そういうことは一切しなかった。利用制限によって得られるメリットと失われるデメリットを考えれば、いずれ一定の時間が経てば生え揃うことでは問題にならない。「遊んで怪我しなければよし」が持論による管理レベルであって、雑草の侵入もそこそこ見られた。芝刈りでは集草は行わない。



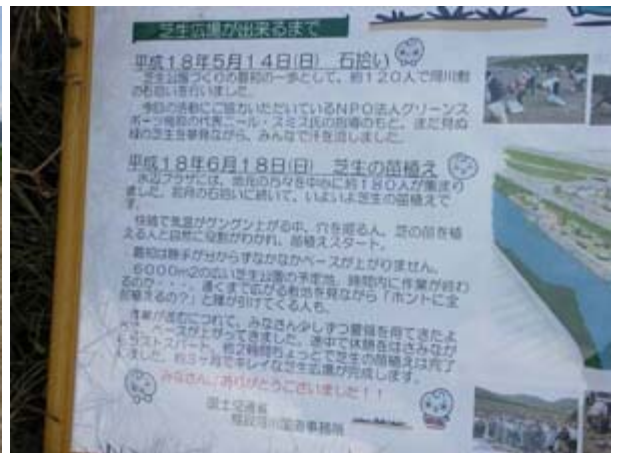


### 3. 千代川（せんだいがわ）水辺プラザ

- 千代川中流域の高水敷（いわゆる川原）6,000 m<sup>2</sup>
- バーミューダグラス+ペレニアルライグラスのOS
- 道の駅と並行して整備されている
- 利用方法はまだ決まっていない。住民参加で協力したグランドゴルフ協会などが優先的に使用できるのか否かなどを、今後協議するとのこと



もともと、国土交通省が従来どおりの方法で芝生による緑化事業を行う予定だったところ、前述の NPO グリーンスポーツ鳥取のニール・スミス氏らとの協議により、工事請負発注ではなく、住民参加による話し合い+住民自らによる施工として進められたもの。まだ、供用開始していない。



### 4. 湯梨浜（ゆりはま）町立泊小学校校庭

- 町立の小学校の校庭前面、12,000 m<sup>2</sup>
- コウライシバ
- 造園業者が管理（芝刈り3回と施肥）
- 児童による使用の制限は行っていない。町民に開放しており、見学時はグランドゴルフ大会が開催されていた
- 年間費用、約120万円（100円/m<sup>2</sup>）

- 児童数 170 人 (70 m<sup>2</sup>/人)、芝生化当初は 300 人だったとのこと



この学校の児童は幸せだと思いました。

近時の「校庭の芝生化」のずっと以前、平成3年、時の町長が全面芝生化を勇断されたとのこと。さすがに、芝生生産県鳥取なのか？

#### 5. 私立湯梨浜学園校庭

- 今年から開校した。芝生化施工は昨年
- バーミューダグラス+ペレニアルライグラスのOS、6,700 m<sup>2</sup>
- 現在の生徒数は 50 だが、2 年後には 200 人 (34 m<sup>2</sup>/人)
- 利用制限は設けていない
- 年間芝刈り 60 回以上。管理は、NPO グリーンスポーツ鳥取が受託







## 6. 湯梨浜町立羽合（はわい）小学校校庭

どちらかと言うと、失敗している例。鳥取大学附属やグリーンスポーツ鳥取のように、熱意のある人が管理に携わっているとうまくいくが、そうではなくて、従来方法（管理は委託すればいいだろう）では、うまくいかない、という典型か？

- 平成 18 年度開校の新しい小学校の校庭の一部、7,000 m<sup>2</sup>、児童数 520 人（13 m<sup>2</sup>/人）
- 芝生化施工は 4 月
- コウライシバの改良品種である「TM9」（トヨタ自動車製）
- 管理は、当初は直営だったが途中から造園業者
- 利用制限を設けていて、まだ 10 回も使用していない
- 芝刈り実績 3 回

芝刈りの初回は 5 月。梅雨前に造園業者に委託したが、長雨が続いて芝刈りできない時期が続き、やっと 2 回目が施工できたのは 7 月下旬。当然、軸刈（じくがり）となって、生育が極端に落ち込み、一部（施工早々なのに）張り替えた。

- 「TM9」は、成長が早くないことが特徴で、いわゆる省力化を可能とする品種。主に屋上緑化などに向く。しかし、校庭の芝生のように消耗→施肥→刈り込み→成長を繰り返して育成する管理には向いていないと思う（見学者も、だいたい似たような印象を口にしていた）



他の施設が、概ね「利用制限は設けてない」という中、ここは、芝生がありながら、大事にしすぎて（というか、どういう使用でどの程度の荒れが発生するか分からないからだと思うが）たった数回しか児童をらせていないらしい。せっかく予算化できて芝生化しても、これではもったいない。



#### シンポジウムから、NPO 法人グリーンフィールド鳥取代表ニール・スミス氏）の話題提供

- 30年前に日本に来て、6年前から鳥取市に移り住んだニュージーラド人、ニール・スミス氏が、「ラグビーができるグラウンドを作りたい。当然、芝生で」という熱意で始めたもの。氏によれば、NLでは、小学校などの校庭を「プレイグラウンド」と呼び、全て天然シバで覆われているとのこと。以下、彼の理論。
- 日本の教育場面で特に校庭についての考え方は根本的に間違っている。日本のように小さい頃から土や舗装のグラウンドを使っていると、どうしても「転ばないように」という意識が芽生え、走り方一つにしても大きなストライドで走ることができなくなる。
- 大人になったラグビー選手を見ていると本能的に身をかばうような仕草になってしまう日本人選手とイギリスやオーストラリアの選手では、転倒しようとする直

前の身のこなしの違いが明確になる。多くの日本人選手はタックルを受けて転びそうになると自然と視線が下（地面）に向く。欧米の選手は、転倒して膝が地面に着こうとしても視線はボールや選手に向いている。転倒して膝や肘を打ち付けて痛い目に遭って育った人と、芝生のグラウンドで転倒することの恐怖心が小さい形で育った者の違いだ。また、小さい頃に土や舗装のグラウンドの上で靴を履いて運動することと、芝生の上で裸足で運動することでは、運動神経を発達させる度合いが顕著に違うことは医学的にも明らかになっている。日本では、小学生の運動能力の低下が指摘されているが当然のことだと思う。

- ラグビー場を作りたいという思いは、決して、中田英寿のような一級のプロ選手が使う国立競技場のようなレベルの芝生を求めているものではない。NLの小学校でもそうだが、雑草が生えていてもかまわない。それは、地元住民が散策や犬の散歩、祭りやフリーマーケットなどで自由に使う芝生のレベルだ。その程度のレベルの芝生に維持管理費が膨大にかかろうはずがない。行政に芝生グラウンドを求めると、造成費用や管理費用の大きさに検討が進まないが、100円/m<sup>2</sup>を念頭に考えている。

#### 印象的な説明

欧米のラグビー選手は、小さい頃から芝生の上で当たり前で過ごしているため、倒れこんで肘や膝を地面に着くことへの恐怖感がない。一方日本の選手の大多数がアスファルトや土のグラウンドで育っているため、転倒しようとする瞬間にゲームを忘れ自己防衛の体勢を取ろうとする。誰も指摘しないが、日本の芝生環境の貧困さを現す重要なポイントだ。（・・・うーん、納得！）



タックルを受け、まず地面を見て左手を地面について  
身をかばおうとする日本人選手



このままだと地面に膝が着いて痛いはずなのに  
ゲームに熱中できる欧米の選手